

ついにフランス系社会、文化の伝統を守り抜いたこと、これこそがカナダ社会に対するフランス系の最大の貢献であるといえよう。一七六三年を境に、新フランスと同じく英国領に移行したアメリカ南部の「ルイ州」(ルイジアナ)、「新オルレアン」(ニュー・オーリンズ)などが、跡形もなく消滅してしまったことを思い併せれば、その重要性がよくわかる。

精神的支柱となったカトリック教

この生存のための努力において、大きな役割を果たしたのがカトリック教会である。教会がフランス系カナダの団結を呼びかけ、強力な精神的支柱を提供したからこそ、フランス系カナダは新教化せず、またフランス系の言葉や伝統も失われずに済んだ。二十世紀の始めにカナダを訪れ、カナダに取りつかれたフランス人の小説家ルイ・エモンの名作「マリヤ・シャブドレーヌ」の次のような一節は、フランス系カナダ人の心情を美事に描いている。

(女主人公のマリヤは、厳しい北国カナダの生活を捨てて、暮し易い南のアメリカに移住しようという、恋人ロレンツォの申し出に心を動かされ、考え込んでいます)

「……マリヤは再びひとり言ちた——『だって、この土地はなんといいっても辛い土地だ。なら、どうして留まっていなくちゃならぬいだ?』」

と、その時一つの声、ほかの声よりもずっと強い声が、静けさの中から湧き上ってきた。それはケベックの土の声だった。半ば女の声のように



ケベック州の田舎風景

もあり、半ば教会の司祭様の声のようでもあった……

声は言っていた「われわれは三百年前にこの土地にやって来た。そしてこの土地に留まったのだ。われわれをここへ連れて来られたご先祖たちが、いつまたわれわれの間に戻ってこられようとも、決してお嘆きになつたり、悲しい思いをなさることだけは無い。なぜってわれわれは、ほとんど何一つ新しいことを習い憶えたという事もないかも知れぬが、代わりに、昔からのことを何一つ忘れていないことだけは確かだからだ……」

われわれの周りに外国の奴等がやって来おった。あんな連中は、われわれに言わせりや野蠻人どもだ。連中は権力をほとんどみな手に入れてしまっておった。金もみな連中の手に渡ってしまった。だがケベックの土地では何一つ変わりません。これから先も、何一つ変わるこつちやない……」

ここにみられるような保守的、排他的な心情が、今なおフランス系カナダの人達の胸のうちに潜んでいることは十分考えられる。だがこれは、今みてきたような歴史の推移がしからしめた感情なのである。このことを忘れて、フランス系カナダを理解することはできない。

フランス系カナダは立派に生き残つた。もちろん何もかも皆く行つたわけではない。カトリック教会の旧守的傾向もかなりひどかった。筆者がはじめてケベックに滞在した一九五九年頃は、大学の図書館で、無神論的実存主義者のサルトルはおろか、モンテーニュでさえ、法王庁の禁書目録に載っているからという理由で、自由に閲覧させてもらえないような有様だった。しかしこの情況も、現在では大巾に変わってきている。ここ数年のうちに教育は教会の手を離れ、世俗化が行われた。七一年そして七五年と筆者がフランス系カナダを訪れる度に、国際都市モントリオールはもろんのこと古都ケベックも、どんどん自由な感じがあふれるようになつていった。いな、むしろ今までの反動で振子が反対に揺れつつあり、反カトリック勢力の増大、極端なヒッピー化、そして独立運動を唱える過激派のテロなどが新聞の紙面を賑わすほどであった。

日本の十倍からの面積と豊かな天然資源をもち、大西洋にも面しているケベックの独立は物理的には十分可能とすることが出来る。しかしその資源の開発を行うのに必要な自己資本の不十分さ、人口が少ないことからくる州内市場の狭さ、カナダが否応なしに組み込まれてしまっている北米消費体制等々の条件を考

えると、むしろカナダ連邦のうちに留まっている方が、得るところ大であるように思われる。また連邦政府も、各州の自立性を出来るだけ尊重する方向を打出しているのは賢明な政策であるといえよう。社会全体が、何が何でも同じような物の考え方をしなければ気が済まないというような、狭量な画一主義者でもない限り、価値の多様性こそ、たとえ時としてそれがいかに厄介なものに思われることがあつても、一国の文化の豊かさに通じる大前提であることに納得が行くはずである。

前にも触れた通り、フランス系カナダは外的な圧力に耐えて、今日その存在を十分確立しているし、それと共にその主たる性格をなしていた教会も変化しつつある。そしてこれと相並んで、フランス系カナダに特有な単語や表現、用法などを大巾に採り入れた「カナダ・フランス語辞典」の刊行(初版一九五七年)は意味深長だ。言葉というものが、人間の知的、意識的活動にとつて、最も有力な道具であるだけに、大別すればもちろんフランス語文化圏に属しているとしても、旧大陸のフランス語にベッタリ追随するだけではなく、カナダ独自の現実

に即した豊かな言葉を創り出そうという、独自性への重要な一歩と考えられるからである。折から人間の歴史にその類をみない大規模な情報交換手段の発達によって、地球じゅうのあらゆる思考や行動の均一化が進行中である。この大勢の中で、これまでややもすれば受身的な個性ではなく、積極的なフランス系カナダの個性の確立・発展には、人間の可能性に絶望したくないと希う者達の、大きな関心と期待が寄せられる。